

## 1. 教育の責任

国際日本学部のディプロマ・ポリシーに掲げられている「国際的視点にもとづく歴史、言語、文化、文学の素養を持ち、俯瞰的、総合的なビジョンの形成に資する人材」の育成の一環として、西洋史を学ぶことを通じて、最終的には、主に以下の能力を修得してもらうことを目指している。

1. 過去の歴史をできる限り同時代の価値観に即して理解することができ、それにより現代の価値観を相対化できる（時間を越えて過去の人々の考え方や感性に寄り添おうとする姿勢）、2. 遠い外国の歴史であっても、自らと無縁のことは思わず、それを日本の歴史と比較して関連づける視点をもち、それにより自国の文化・価値観を相対化できる（空間を越えて異なる文化を理解し、それを尊重する姿勢）、3. 西洋の歴史を一国単位あるいはヨーロッパ世界の中で完結したものとして理解するのではなく、国際的にあるいはヨーロッパ外の世界との関わりにおいてとらえ、かつ、それにより西洋中心的な視点を相対化できる（グローバルな視点から世界史を見る姿勢）、4. 王侯・貴族・聖職者・市民（女性・男性）など様々な歴史主体の利害・立場やそれらが織りなす関係性に着目して西洋史を見ることができ（複眼的に歴史を見る姿勢）、5. 現代における様々な事物・出来事や現代人の意識・価値観が、多かれ少なかれ歴史の産物であり、過去の歴史とつながっていることを理解できる（物事を歴史的に見る姿勢）

2025年度の担当授業科目は下記の通りである。

「キャリアデザインⅢ」（演習、コアカリキュラム科目、春学期、2単位、17名）

「キャリアデザインⅣ」（演習、コアカリキュラム科目、秋学期、2単位、17名）

「西洋史の扉」（講義、東洋史・西洋史メジャー選択必修科目、春学期、2単位、51名）

「西洋史講義」（講義、東洋史・西洋史メジャー選択科目、春学期、2単位、42名）

「西洋史総合講義」（演習、東洋史・西洋史メジャー選択必修科目、春学期、2単位、11名）

「西洋史研究 A」（演習、東洋史・西洋史メジャー選択科目、秋学期、2単位、24名）

「西洋史基礎演習 A」（演習、東洋史・西洋史メジャー選択科目、秋学期、2単位、35名）

「西洋史研究の歩み」（講義、東洋史・西洋史メジャー選択科目、秋学期、2単位、43名）

「ゼミナールⅠ」（演習、コアカリキュラム科目、春学期、2単位、8名）

「ゼミナールⅡ」（演習、コアカリキュラム科目、秋学期、2単位、9名）

「卒業研究」（演習、コアカリキュラム科目、通年、4単位、11名）

## 2. 教育の理念

「グローバル化」という言葉が聞かれるようになって久しいが、今日、世界の出来事が自国の政治・経済や日常生活などに重大な影響を及ぼしうることは明白である。また、日本に居住する外国人の数も年々増加している。このような状況において、国境を越えた国・地域間の協力・連帯や、異なる文化的背景をもつ人間同士の共生は重要な課題であり、本学の建学の目的である「優れた国際感覚及び問題解決能力を備えた人材」が求められていると言える。私の専門とする歴史学は、国際的な諸問題や多文化共生に直接の解決策を与えるものではないが、上記1で述べた5つの能力を修得することは、国際感覚や問題解決能力の育成につながると思う。西洋史を学ぶことを通じて、最終的にはこれらの能力を修得してほしいが、まずは、外国の出来事や文化に関心をもち、「内向き志向」を乗り越える精神を養ってもらいたいと考えている。

また、日本人の平均寿命は男女ともに80歳を超え、人生100年時代の到来が予想されている一方で、人生や生活の質が問われるようになっている。本学の建学の精神である「生涯にわたる、人生のための学び」は、ただ生きるのではなく、よく生きるうえで今後、重要性を増していくと思われる。建学の目的である「豊かな教養」や「旺盛な自己開発精神」の育成は、この人生のための学びの基礎となるであろう。上記1で述べた能力の修得は、こうした教養や自己開発精神の育成にも資すると思われるが、さしあたり、西洋史を学ぶことを通じて、批判的な情報の摂取能力や価値判断能力を身に付けてもらいたいと考えている。なぜなら、とりわけインターネットを通じて情報があふれている現代社会において、情報の真偽や物事のよしあしを判断する能力、そのための基盤となる、教養に裏打ちされた知性・道徳・価値観を持つことは、人生をよく生きるうえで非常に重要と思われるからである。複数の史料や研究文献を参照して、批

判的に歴史像を再構成することや、その過程で過去の人々の思考・判断・行為に触れることは、こうした批判精神や価値判断能力を鍛えることにつながると考える。

### 3. 教育の方法

上記1と2で述べた目標と関連して、授業では以下のようなことを行った。ここでは3つの授業を例として挙げる。

「西洋史の扉」では、西洋史における重要なテーマをいくつか選んで取り上げ、1つのテーマを3～5回で講義し、西洋史に興味を持ってもらうことを目指した。特に、食卓革命を扱ったパートでは、グローバルな視点からヨーロッパと世界のつながりを見ることに力を入れた。「西洋史講義」では、古代から近世までのヨーロッパ史を概説しながら、特定のトピックを挟み込んで深掘りしている。例えば、古代の民主政、中世の紛争解決などを取り上げ、現代とは異なる、当時の人々の考え方や意識のあり方に注意を促した。「西洋史研究の歩み」では、歴史の見方・解釈の仕方や世界（史）認識の変遷をたどり、また、今日の歴史学の基礎がどのようにして形成されたかを大まかに示している。今年度は特に、歴史解釈・世界認識の枠組み（理論）が、実際にわれわれが持っている歴史や世界の見方にどのような影響を与えているかを知ってもらおうと試みている。

なお、以上の授業では、授業内容の理解の向上を図るため、el-Campus で復習課題を出し、回答してもらっている。その際、受講生が授業内容をふりかえって要点を整理し、課題の要求にそって自分の言葉で再構成することを重視している。これを繰り返すことが、能動的に考え、批判的に情報を摂取し、情報を分析・総合する能力を身に着けるための基礎になると考えるからである。また、まとまった文章を繰り返し書くことを通じて、書き言葉や論理的な文章に慣れてもらうことも意図している。このため、提出された回答例（2～3例）の紹介・添削・コメントと、回答のポイントの解説を掲載した資料を el-Campus を通じて配布し、それをもとに、次の回の授業の初めに解説を行っている。2024年度に引き続き、2025年度もこのフィードバックに特に力を入れている。

受講生には、まずは、色々な事に関心を持つ、物事を色々な視点から眺める、多様な価値に触れる、情報を主体的・批判的に摂取する（参照した情報をうのみにしない）といった姿勢を身に着けてもらいたいと考えている。

### 4. 教育の成果

西洋史への関心を高めるという点は、「西洋史の扉」の授業アンケート（自由記述）を見る限り、ある程度、達成されている。「西洋史講義」に関しては、授業期間内に実施した中間アンケートの回答は概ね好意的で、高校の世界史よりも詳細に西洋史を概説するという目的は果たせている。「西洋史研究の歩み」についても、同様のアンケートから、難度が高めの内容であるにもかかわらず、授業の趣旨はある程度理解されていると思われる。また、同じアンケートから、担当授業全般に関して以下のような回答が見られた。①レジュメがわかりやすくまとめられている、図版などの視覚資料を利用してわかりやすい（授業内容の理解を促進する効果）、②復習課題の振り返りで前回の内容が思い出せてよい（内容の定着を促す効果）、③復習課題は、知識の定着に役立っている、文章をまとめる練習になる、問いについて自分で考える意識が高まった、昨年度より文章をまとめる力がついたなど、上の3で述べた課題の趣旨に沿った回答が見られ、心強く感じている。他方、昨年度同様、課題が難しいという回答も散見され、改善の余地がなお存在する。

### 5. 改善への努力と今後の目標

1. 大学での学びと西洋史への関心を高める工夫を継続する（例えば、自身との関わりを感じさせる）。2. 復習課題に基礎編・発展編などの難度を設け、各受講者に見合った目標を設定する。3. 自身の力で問いについて考え、文章をまとめるという課題への積極的な取り組みを促し、フィードバックを繰り返す。これにより、4年を通じてステップアップを実感させ、学習意欲の向上につなげる。

### 【添付資料】

2025年度春学期、「西洋史の扉」授業アンケート、「西洋史講義」中間アンケート（el-Campus を通じて教員が自主的に実施）  
2025年度秋学期、「西洋史研究の歩み」中間アンケート（el-Campus を通じて教員が自主的に実施）